

ほっかいどうタンポポ



代表
墨谷 健



代表顧問
高橋 義男

北海道

団体の創設者で北海道立小児総合保健センター（当時）の脳神経外科医だった高橋義男さんは、治療後も障がいが残る子どもたちに水泳療育を提唱し、平成5年に「ほっかいどうタンポポ」が発足した。現在、苫小牧、札幌、江別、室蘭、小樽、函館の6市と空知管内新十津川町で定期的の水泳療育が行われ、80の家族会員が毎週参加している。水泳療育以外にも、親たちがアイデアを出し、会員家族が一堂に会し、個々では取り組むことの難しい、ラフティングやカヌー、乗馬や吹きガラス、陶芸などを行っており、大勢でチャレンジすることで互いが刺激し合い、不可能を可能にする取り組みを続けている。こうした積極的な取り組みで、受け入れ側の姿勢も変わり、社会の体質を変える一石となっている。20年に及ぶ活動。

（推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団）

「表彰式典を終えて」

この度は、代表顧問の高橋義男医師と代表家族で表彰式典に出席させていただきました。

我々の活動が新聞記事掲載をきっかけに財団の推薦を受け、全国136件の候補から47件の1つに選ばれ驚きました。さらに、式典では活動紹介をビデオ映像で流すことが決まり、編集された映像はインパクト・説得力ある素晴らしい作品に仕上げられていました。

前夜祭では、受賞者皆さん一人ずつ活動紹介がありました。その話を聞くたびに熱い思いに心を打たれ、洗われ、本当に素晴らしいと言う気持ちで胸が一杯になりました。昨今、個々が忙しくなり人を思いやる気持ちをなかなか持てないと言われる中で、それを感じさせずに惜しみなく積み重ね実践していることに頭が下がります。こうして表彰を受けた方々が毎年増え、社会貢献活動の裾野が広がり活性化していくと考えています。

活動を始めてから、代表顧問の高橋義男医師は常々「子ども達が社会に出るまで治療は終わらない」と言っています。個々では不可能でも大勢でチャレンジすると互いが刺激し合って可能になる。能力を引き出し、伸ばし出来ることを増やす、そうした積極的な取り組みを行って、地域の理解・協力を得てそれぞれの地域で根付いていく、社会の体質を変える活動をこれからも実践していきます。また、今回の受賞をきっかけに会の運営などを見つめ直す良い機会とし、さらに活動を前へ進めていきます。

式典では皇室から女王殿下のご臨席、会長の安倍昭恵夫人から表彰状の授与や祝賀会では握手し一緒に記念撮影までして頂き、良い思い出となりました。

二日間に渡り財団の皆さんには大変お世話になりました。

日本の迎賓館として誕生した帝国ホテルに宿泊し表彰式典に臨むことは一生に一度、素晴らしい経験をさせて頂き、お礼と感謝を申し上げます。

最後に、札幌で一緒に活動していた元会員・家族が我々の祝福に駆け付けてくれました。

本当にありがとうございました。

代表 墨谷 健



▲水泳フェスティバル in 小樽 (2012.10)



▲乗馬療育 in 白老 (2013.9)



▲設立20周年 グラムツアー (2013.9)



▲タンブラカップ in 三笠 (2013.11)



▲木工品製作体験 in 大沼 (2014.6)

NPO 法人 ボルネオ保全トラスト・ジャパン



理事兼事務局長
青木 崇史

東京都

NPO 法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン (BCTJ) は平成20年設立。マレーシアのボルネオ島で、同国の主要産業であるパーム油生産のためのアブラヤシ・プランテーションの開発により急減する熱帯雨林を保護し、生物多様性を保全するための「緑の回廊」プロジェクトを進めるボルネオ保全トラスト (BCT) への資金援助を続けている。BCT 設立に当初から関わり日本企業やマレーシアのサバ州政府当局を動かす一方、BCTJ としてもプランテーションに迷い込み荒らしてしまうとして害獣扱いされるボルネオゾウを一時的に保護する「野生生物レスキューセンター」を設立。施設の安定的な運用に向けて活動を続けている。

(推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団)

特定非営利活動法人 ボルネオ保全トラスト・ジャパンは、マレーシアのボルネオ島で生物多様性保全、熱帯雨林保護の活動を行っています。

貴重な熱帯雨林が残る土地を現地の組織と協力して購入し、動物たちの生息域を少しでも保つようにしたり、植林によって将来に熱帯雨林を残す活動をしたり、動物たちの保護施設を作ったり、ボルネオ島の環境破壊の様子を日本の方々に伝える環境教育を行ったりしています。

ボルネオ島の熱帯雨林は1980年代頃から急激に減少し、それに比例して動物の数も激減しました。最大の原因はアブラヤシという植物を育てるためのプランテーション (大規模農園) が急激に広がったことにあります。アブラヤシから採れる植物油を『パーム油』と呼び、日本も年間60万トンほど輸入しています。

でも日本では『パーム油』という名前は馴染みがありません。日本人が最も消費する植物油は菜種油ですが、実はパーム油は2番目に消費量の多いのです。にもかかわらず、パーム油という名前がわかる方はほんの一握りです。なぜでしょうか。

パーム油は加工品や店舗として使われる事が多く、一般の方が直接目にする機会がとて少ないのです。チョコレートやアイスクリームの食品表示欄に「植物油脂」と書いてあれば、それはほとんどがパーム油です。冷凍食品製造工場で使われる揚げ油もパーム油であることが多いでしょう。パーム油は安くて使い勝手の良い油です。スーパーやコンビニで買える食品の50%以上にパーム油が入っていると言われます。私たちが美味しいものを安く買い、便利な生活を送ることができている一端にはパーム油の活躍があるのです。

そんなパーム油は、熱帯雨林を大量に伐採した跡地で作られます。生物多様性保全や地球温暖化防止というキーワードが最近良く聞かれますが、自然環境の悪化を防ぐ

ためにも、熱帯雨林や野生動物の保護は最も率先して取り組まなければいけない課題である、と私たちは信じています。

地球は人間だけのものではなく、たくさんのいのちがあってこそ地球です。熱帯の森を増やし、動物たちが自由に生きていける環境を少しでも多く残しておきたい。それが私たちの願いです。

日の当たることが少ない地道な活動ですが、今回の受賞によってボルネオ島の現状やパーム油の存在を少しでも多くの方に知っていただき、そこで何かを感じ、行動を始めただけの方がいらっしゃれば幸いです。

ありがとうございました。

理事兼事務局長 青木 崇史



▲吊り橋を渡るオランウータン



▲オランウータンの孤児院



▲吊り橋



▲プランテーション



▲ボルネオゾウ

松山 倫政



認定 NPO 法人
日本ブルキナファソ友好協会
理事長

千葉県

アフリカのブルキナファソ国は、マリ、ニジェール、ガーナ等6カ国に囲まれた西アフリカの内陸に位置する。海外青年協力隊も入っていない国へ平成7年に横浜で「日本ブルキナファソ友好協会」を設立。小学校建設6校、井戸30基、診療所5カ所、学校用机とイス5,700セット等、教育、医療、保健衛生等の分野へ20年近くにわたり支援を続けている。

(推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団)

平成24年度社会貢献者表彰の授賞に際し、とても名誉なことと思っております。今回は、私が代表する形で受賞いただきましたが、日本ブルキナファソ友好協会のメンバー及び応援してくださっている方々全員での受賞と思っております。

世界で最貧国といわれているブルキナファソ、しかしアフリカ56カ国の中でこの国だけが争いがなく、日本よりも治安が良いというのは国民性なのでしょう。貧困で生活環境が苦しくても、いつも我々を笑顔で迎え入れもてなしてくれます。

私が最初にブルキナファソを訪れたのは42年前、オートボルタ（旧国名）の時代にさかのぼります。

ブルキナファソは、「もてなしの国」といわれているとおり、その当時でも、私は多くの人たちから暖かい歓迎を受けました。経済大国と引き換えに失ってしまった日本人の美しい心を、我々はブルキナファソで見つけることができるのです。

3年に及ぶバックパッカー生活、途上国の方々には大変お世話になりました。その恩返しがしたいという一念から、1995年に日本ブルキナファソ友好協会を横浜市で立ち上げ、1999年には神奈川県で最初の NPO 法人として登記しました。また、2001年には本部を千葉県白井市に移し活動の場を広げ、児童たちと共にネリカ米の稲作を開始しました。さらに2004年には、運営組織及び事業活動が適正であることから国税庁長官より全国で13番目（千葉県では最初）の認定 NPO 法人として認定されました。2014年には、名誉会長としてフランソワ・ウビダ駐日特命全権大使が就任するなど、両国間の絆はより一層深いものになっています。

協会設立以来、日本とブルキナファソの懸け橋になるよう、青年海外協力隊も入っていないブルキナファソでの活動を続け、教育、医療、保健衛生、農業の分野で、これまでに小学校6校、ポンプ式深井戸31基、診療所5カ所、ネリカ米の稲作、日本で

使わなくなった学校用机とイス5,200セットの寄贈などを行ってきました。その活動は内外ともに高く評価されております。

私はブルキナファソで多くの友を得、そして協働で事業を邁進してまいりました。良き友と共に同じ目的を達成するのは、私の喜びでもあるのです。

そして、協力してくれた両国の多くの人たちのおかげで、この度社会貢献者表彰という、栄誉ある賞をいただくことが出来ました。この度は、このような機会を設けていただき心よりお礼申し上げます。

また、これまでご支援、ご協力いただいた関係者各位に、心より感謝すると共に、この受賞を機に、これで終わるのではなく、両国のためにさらなる活動を続け精進してまいりたいと思います。



▲ポンプ式深井戸の設置（33基を設置）



▲女性だけの協同菜園の運営（4ヶ村）



▲診療所にポンプ式井戸を設置（私と看護師たち）



▲白井第一小学校とカバネ小学校とで Skype による TV 交流会（5回）



▲白井第一小学校と協働でネリカ米の稲作（11年）

野菊荘



施設長
芹澤 出

京都府

京都市で、昭和17年に戦争で配偶者を失くした母子の救済を目的に施設の運営を開始し70年以上。時代の変化により、利用者はその後、未婚や離婚による生活困窮母子、サラ金被害母子、近年ではDV被害や児童虐待、心身障害や精神疾患により生活や養育が困難となった母子へと推移してきている。定員30世帯で、いづれも逃げるようにして施設に入ってくる母子に少しでも快適に過ごしてもらうよう、またその後の自立を支援するために行政の隙間を民間で補う活動を続けている。

(推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団)

この度、公益財団法人社会貢献支援財団様より、野菊荘の取り組みに対し社会貢献活動表彰をいただきました事は、誠に身にあまる光栄に存じ胸をうつ感謝と共に厚くお礼を申し上げる次第でございます。

野菊荘は昭和17年に恩賜財団軍人援護会京都府支部によって、戦死した軍人遺家族の母子を対象にした授産・託児事業として設立されました。

昭和55年1月、寮長であった芹澤栄之が老朽化した施設改築のために社会福祉法人宏量福祉会を設立し、私財を処分し寄付した2000万円、中国展バザールを開催して得た収益、寄付金の合計3140万円と積立金500万円の自己資金に、借入金5660万円と国庫補助金と京都市補助金を併せ、総工費3億6100万円をかけて昭和56年4月新築したのが現在の野菊荘の建物です。

新築された野菊荘は利用者の生活の向上のために、各居室内にバス・トイレ・台所を配置し当時としては画期的な施設として生まれ変わりました。また、DV被害者や借金からの逃避等の「かけこみ相談」への緊急避難対策として、全国で初めて定員以外に三室の緊急一時保護室を設置しました。当時はDVという言葉や緊急一時保護制度もなく独自運営していました。翌年の昭和57年にNHKで「現代の駆け込み寺」として緊急一時保護事業が紹介され、放映により全国から避難してくる母子が殺到しました。

平成13年にDV防止法が制定され、DV被害者への支援が本格化する中で、平成17年には京都市内唯一の民間シェルター「シェルターみやこ」を開設しました。緊急一時保護事業を施設外で実施することにより、行政機関からの一時保護委託だけではなく、様々な民間団体からの依頼や利用者との直接契約による一時保護が可能となり、幅広いニーズに対応した一時保護施設となりました。

平成23年4月には、これまでのDV被害者支援の取り組みが評価され、京都市よりDV相談支援センターの運営を委託され、同年10月に開所しました。これにより野菊荘が行う「社会的養護事業」は、DV相談支援センターによるDV被害者の相談・支援、シェルターみやこによる緊急一時保護、野菊荘本体施設での保護受け入れとワンストップ支援体制を持った施設となりました。

この度、野菊荘の70年以上にわたる母子保護の実績を評価いただき、社会貢献功勞

賞をいただきましたことは、私たちにとってとても大きな励みとなりました。この受賞をバネに今後さらに地域社会に貢献できる施設として、地域の皆様方のご理解とご協力をお願いしながら、DV 被害者やひとり親家庭の方々に対する新たな事業の実施に向けて取り組むと共に、施設機能のさらなる充実を図っていきたくと考えています。

施設長 芹澤 出



▲ DV 被害者相談室

平成23年より、これまでのDV被害者支援活動が認められ、京都市よりDV被害者の相談支援業務を受託することになりました。これによりDV被害者への相談からシェルターで一時保護、野菊荘での中長期支援へと切れ目のない支援体制を構築する事ができました。写真は、相談室の様子です。ゆったりと落ち着いた雰囲気の中で、丁寧に相談者の思いや気持ちに寄り添う支援を行っています。



▲野菊荘 親子海水浴 岩場にて子どもたちの飛び込み挑戦の風景

DVや児童虐待により、自尊心や自己肯定感を傷つけられてきた子ども達も、職員や友達に見守られながら、自然の中で思い切った挑戦をすることで自信をつけ、自尊心や自己肯定感を取り戻していきます。



▲野菊荘 母親レクリエーションのコットン教室 布絵本作り作業風景

母親が趣味や余暇を楽しむ時間も大切にしています。母親レクリエーションの時間は職員が子どもを保育し、落ち着いた雰囲気の中でゆっくり楽しんでもらう事を大切にしています。このような取り組みが生む母親の心のゆとりは、子育てや生活にゆとりと安定感をもたらします。



▲昭和56年改修された野菊荘

昭和56年に老朽化した施設を改築し、日本で初めて緊急保護室を定員外に3室備えた施設としたため、全国からDV被害者が駆け込んでくる施設となりました。DV被害者が安全に安心して生活できるように、福祉施設であることや母子生活支援施設であることは書かれていません。



▲昭和17年竣工当時の平安寮（現在の野菊荘）

野菊荘の前身である平安寮は昭和17年に戦災遺族母子を収容する施設として設立されました。

米谷 新



埼玉県

インド等では、ボランティアによる医療と称して自らの技術向上のために、実験的な白内障手術等の医療行為が行われているともいわれる状況下で、大学の教授職を現役中の、技術的に自分のベストの時に、日本の最先端の医療技術による「マハラジャ（王侯）の手術」を施す活動を同国のカーシオン市で、平成15年から7年間、171人にわたり行っている。一方では、現地の医師を日本に招き、研修を行い医療技術の指導も行っている。現地で知人の協力を得ながら、機器の設置から手術までを、まさにたった一人でのボランティア活動を行っている。

（推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団）

「インド・マハラジャ白内障キャンプ」

2003年12月末から始まり2013年まで、7回に渡って行われたインド白内障キャンプが社会貢献者表彰の対象となった。名誉であり嬉しい事であるが、「相応のことをした」という実感に乏しいのが正直の所である。

白内障キャンプの場所となったのは、有名なダージリン紅茶を産出する地域の小さな町のカーシオンにある病院である。コルカタにある郡の病院の分院で、眼科医もいるが、呆れる程医療器械がなく、診療、手術に関わる一切切の医療機器、器具、薬品から水にいたる迄、全て日本から持ち込んだ。特に、第一回目には精密機械である手術用顕微鏡の移送に際しては、航空便で送るなどの配慮を協賛の会社にして頂いた。

病院では、衛生、非衛生の意識が日本のそれと比べるととても鷹揚であったので、大学病院並のレベル維持に相当な神経を費やした。同行の医師はいないため、手術場のセッティングから、手術準備には、日本側窓口となった石井一家の皆様にご協力頂いた。俄仕立てだが有能な助手として活躍して下さった。

手術は、当時日本でも最先端であった、3mm幅の切開創から白内障を超音波で砕いて取り出し、そのあと、人工水晶体を折り畳んで挿入するという方法で行った。ちなみに、人工水晶体の日本での上梓価格は10万円であり、まさにインドではマハラジャしか受けられない手術であったので、プロジェクトの名前を「マハラジャ白内障キャンプ」とした。手術には、現地ドクターを助手につけ、最先端手術の教育も同時に行った。日本で行う多くの白内障と異なり、すっかり濁って固くなった水晶体が多いので、超音波での手術では困難があったが、第7回白内障キャンプ終了まで合計174例全例を安全に終了することが出来た。

白内障キャンプを始めた当時は、2、3回で終了する積りであり技術移転のため、第二回キャンプ終了後に現地ドクターである Dr. Gosh を日本に招待し、白内障手術

と眼科一般の研修を経験してもらった。白内障術者として高い評価を得る一方、彼も現地でボランティア活動をするようになっていくと聞いている。

最後に、このプロジェクトに関わった、ダージリンの茶園主であるラジャ バナージ氏、バナージ氏をご紹介下さり日本の窓口と現地手術にもご協力いただいた石井一家、医療機器および製薬会社10数社に深謝してこのプロジェクトを終了致します。



▲現地ドクターの指導



▲手術を待つ人々



▲手術風景



▲術前診察風景



▲白内障キャンプでただ一人全身麻酔下で前の年に手術した女兒。視力改善して一年後の訪問



▲白内障キャンプを行ったカーシオン病院

ボリビア、オガル・ファティマにおけるイエスのカリタス修道女会の邦人シスター達



シスター
樽角 カネ

ボリビア多民族国

南米ボリビア多民族国、サンタ・クルス州のファティマの聖母乳幼児院で平成2年からほぼ四半世紀にわたり、孤児、虐待、家庭内暴力、両親の麻薬やアルコール中毒などさまざまな事情により家庭での養育が困難な乳幼児たちを収容、養育している。当初、この乳幼児院は劣悪な養育環境や食糧事情、ずさんな運営管理であったため、州の福祉課が援助を求め、邦人シスターたちに運営が委託された。シスターたちの献身的な活動により、日本からの支援などで乳幼児たちの発育や運営も改善してきたが、同国の社会・経済状況の発展は緩慢であるため、政府機関からの保障は不安定であり、支援が途切れると運営管理に支障が生じるというぎりぎりの中で、現在も子どもたちの健やかな成長を見守り、養育する活動を続けている。

(推薦者：海外邦人宣教師活動援助後援会 (JOMAS))

「ボリビア・宣教二十五年」

この度は、栄えある受賞式又、夕食会にご招待頂き、心より感謝申し上げます。

皆様方の自己紹介で、活動の実体を聞き感動と同時に、学ぶ事も多々あり激励されました。

ボリビア多民族国のサンタ・クルス州で、様々な事情によって、家庭での養育が困難な乳幼児を収容して、25年になります。社会的、政治的不安定な状況は、現在もあり、当初とは変わりませんが、それでも、今日では、当初に比べて、可成り改善されてきました。

当時は、運営管理は元より、子ども達に与える日々の糧さえも、危機に陥ることが度々でした。

そんな時、神様は不思議な方法でいつも、救いの手を差し伸べて、支援者を送って下さり、どんなに感謝しても足りないと思いました。

特に、日本海外邦人宣教師活動援助会 (JOMAS) のご支援には心より、深く感謝申し上げます。

サンタ・クルスの福祉課より乳幼児を委託された当時の子ども達の殆どは、栄養失調で最悪の状態でした。ある時など新聞に包まれた赤ちゃんが、運ばれてきた時は、瀕死の状態でどんなに手を尽くしても、生命力を戻すことができず、亡くなっていました。

それで、JOMASの方に願い、実地検分して頂き、日本の森永ミルクを、年間通して頂くようになり、赤ちゃんの生命を、助けることが出来ました。本当に感謝しました。

25年の歳月の中で、国情の不安定、極度の貧困、特に、家庭での子ども達の養育の

困難さは、解決できない状態ですが、神様はいつも、私たちの祈りに応えて下さる事を信じて、前進して行きたいと念じています。今後ともどうぞ、よろしくお願い致します。

イエスのカリタス修道女会 樽角 カネ



▲2013年12月のある日



▲オガールファチマの子供たち



▲現在の施設長 シスター立石順子



▲1990年当初のシスター方



▲マリア様への祈り



▲散歩の途中でおやつをもらいました！



▲本会創立記念日を皆で祝う

浦河べてるの家



北海道

設立者でもある向谷地生良さん（北海道医療大学教授）佐々木実さん（現法人理事長）を中心に、入院にかたよりがちな精神科（統合失調症）の医療から、同病の人と共に暮らし、向き合いつつ「病気の半分は病院で、残りはべてる（浦河べてるの家）で治す」をモットーに昭和59年から30年にわたり活動を続けている。北海道日高管内浦河町の教会内で始まった活動は、昆布の加工、販売や福祉用品の販売、カフェの運営等を行ない自立への道を探る同病者約90人が暮らす共同体（家）となっている。社会福祉法人としての運営や同病の当事者が自ら研究して共に解決方法を考える「当事者研究」等が注目され、年間2,500人以上の見学者も受け入れて海外との交流も始まっている。

（推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団）

理事
早坂 潔

「社会貢献賞を受賞して」

このたびは、栄えある平成26年度社会貢献支援財団「社会貢献賞」を受賞することが出来ましたことを心から感謝申し上げます。

振り返れば、浦河べてるの家の活動は、1978年の統合失調症などを持った若者達の回復者クラブ活動に端を発します。なかなか理解されることの難しく誤解や偏見を持たれやすい精神疾患を持ったことを恥とせず、一人の市民として自分たちなりの成熟を目指してはじまった交流活動は、後に日高昆布の産直起業を通じた地域づくりへの挑戦拠点としての浦河べてるの家の設立につながります。べてるの家は、2002年に社会福祉法人となり、現在、100人以上の様々な障害をもった人たちの就労や社会参加活動の場として活用するまでになりました。

この30年で、地域の過疎化（人口20,000人⇒13,000人）も進み、地場の産業（漁業、競走馬の生産、官庁の撤退）の弱体化が進む中で、べてるは「べてるの繁栄は、地域の繁栄」をモットーに、地域で暮らす障害を持つ人たちの就労サポートセンターとして、日高昆布の産地直送やグッズ・出版物の作成販売、コミュニティーカフェの運営、生活サポートセンターにおいては、グループホームや共同住居を整備し、入院患者の地域移行の受け皿としての役割を担い、病床削減（130床⇒10床）にも貢献することが出来ました。

また、病院の敷地管理やスーパーの清掃請負や介護用品事業などの販売を行っている（有）福祉ショップべてるの創設（1993年）、ピアサポーターの育成／派遣、研修事業を担うNPO法人（セルポ浦河）の設立などがさまざまな事業を展開しています。それらの中で、特にべてるの歩みの中で大切にしているのが「当事者研究」（2001年スタート）という自助活動です。従来研究対象とされていた人たちが、逆に自分を研

究対象として生活体験の中からテーマを取り上げて実際に研究するという活動は、いまや国内はもとより海外にまで広がりつつあります。

統合失調症などを持つ人たちの自助努力の一環としてはじまったのですが、これからも地域の人たちをはじめ、関係者の皆様のご支援、ご協力を得ながら地域課題の担い手として精進していきたいと願っていますので、ご指導のほどよろしく願いもうしあげます。

理事長 佐々木 実



▲主力の日高昆布などの海産物商品



▲べてるの起業の原点である昆布の製造販売部門



▲現社会福祉法人浦河べてるの家本部



▲野菜畑（無農薬・有機栽培）



▲商品の販売コーナーを兼ねた土と藁でつくった「カフェぶら」

社会福祉法人 広島いのちの電話



広島県

広島市で昭和63年に開局され平成10年に社会福祉法人となる。24時間・365日・年中無休・毎日の対応で、電話を通じて悩みを抱える人の最後の砦となって、これまでに37万件近くの相談を受けた。ボランティアの相談員になるには2年間の養成講座を受けた上、適正を審査され認定を受ける。電話相談を月2回以上、深夜当番を年2回以上担当することが基本。無報酬、交通費の支給なども無いボランティア活動で、相談内容は深刻な内容が多く、ストレスにもなるため、相談員には経済的、精神的にも相当な覚悟が求められる。

(推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団)

理事長

田宮 トシエ

「社会貢献賞」記念式典に出席させていただいて

この度は、帝国ホテル孔雀の間に於いて瑤子女王殿下御臨席のもと、格調高い表彰式にお招きいただきまして心より厚く御礼申し上げます。

瑤子女王殿下、安倍昭恵会長、内館牧子選考委員、皆様の気品に溢れた温かく包み込まれるようなご挨拶に只々感激し、改めて受賞の重みを感じ身が引き締まる思いを致しました。

盛大な記念式典が催され、この様な晴れがましい席に「広島いのちの電話」が受賞団体として同席させていただきました事は、大変光栄なことであり、また、受賞者を代表して「広島いのちの電話」がご挨拶させていただいたことは、二重の慶びでございます。

式典では、受賞者47組それぞれの活動や功績が見事に映像化され地道な活動にも、しっかりと光を当てて下さり、社会貢献支援財団様の存在は私達に勇気と力をお与えくださいました。又、世間からの注目度も低く、脚光を浴びる事も少ない社会貢献活動の推進に、この様に多くの方々をご参加されている事の驚きと尊敬の念を新たに感じました。

「広島いのちの電話」は、24時間365日、眠らぬダイヤルとして自殺防止のために現在、150名の無償ボランティアが手弁当で日夜相談電話を取り続けております。このボランティア活動は、誰に認められることもなく、やり続ける覚悟のもとに私達は、33年間活動して参りましたが「地道な活動ご苦労さん、ちゃんと見ていますよ」と、この度このようにお声をかけられ、お励ましをいただいたことで、改めてよき隣人として「死にたい」と訴えられる人々の声を傾聴し「生きる」という希望に自ら目覚め、立ち向って行く勇気を持っていただく迄、しっかりと寄り添い、心を込めてボラン

ティア活動を続けていく想いを一同、強く、強く心に刻みました。

今回の受賞は、私達の永年に亘るボランティア活動による自殺防止の傾聴活動をご理解の上、高く評価いただいた賜物と「広島いのちの電話」一同、今後とも一丸となって孤独と人生の危機にあって、生きる希望や気力を失いつつある人々に対し適切なお援助が出来ますよう更に力強く活動を続けて参ります。

これからも人知れず地道に活動を続けておられる方々に光があたりますよう心からご祈念し、今後ともご支援賜りますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、この様な貴重な機会を与えて下さり又、多額なご厚志をいただきました日本財団様、社会貢献支援財団の皆様方に謹んで感謝と御礼を申し上げます。

理事長 田宮 トシエ



▲公開講演会



▲中国新聞2014年3月21日



▲公開講演会



▲電話相談室内部

特定非営利活動法人 ソルト・パヤタス



事務局長
小川 恵美子

福岡県

平成7年に発足し、フィリピン、ケソン市のパヤタス地区という貧困地区で、ごみの山を物色し、生活費を捻出する子どもやその母親のための支援を行っている。貧困からの脱出には教育が必要と考え、奨学金の援助を行う教育里親運動を行ったり、収入源の確保に手工芸品の生産販売を援助する活動、日本人に向けた現地視察を含めたスタディツアーを実施している。ゴミの町として有名なパヤタスを刺しゅうの町として汚名返上しようと目標を掲げ、女性に刺しゅうによる収入を奨励、利益を生み生計をたてるまでに成長している。

(推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団)

この度は、素晴らしい賞をいただきまして、誠にありがとうございます。

12月1日受賞式当日、社会福祉法人広島いのちの電話様、医療法人聖粒会慈恵病院様をはじめ、尊い活動に人生をかけてこられた先輩方とともに檀上に並ばせていただき、大きな感謝と責任とを感じると同時に、活動を始めた約20年前のことを思い出しておりました。

1994年夏、フィリピンのゴミ山で働き学校に行けない大勢の子どもたちの姿を見たことがきっかけで、ソルト・パヤタスの活動を始めました。当時は19名の子どもの学費を6年間送り続ける、そのことが目標でした。「団体を設立しよう」、「社会貢献をしよう」という意識より、「目の前にいるこの子どもたちに、なんとか学ぶチャンスが与えられないか」というささやかで個人的な思いからのスタートでした。

始めてみたら自分たちがいかに大きな社会課題に対して運動を始めたのか思い知らされることの連続でした。「たとえ極少数の子どもたちを支援したとしても、いったいどうなるのか、それで社会がどう変わるといいのか、ちっぽけな活動にすぎないじゃないか…」という否定的な思いや、「続けられるだろうか…、お金が続くだろうか…」という不安な気持ちと葛藤する日々でした。

半ば無鉄砲に始めた活動ではありましたが、これまで継続してこられたのは、活動に共感し、参加し、支援して下さった多くの日本の市民の方たちのおかげです。また現地で、日本の方からもらったチャンスを生かして進学し、自分の学びを他の子どもに伝えようとする子どもたちや女性たちが出てきてくれたことによると思います。

課題の大きさ、壁の高さは、残念ながら開始当初と比べ変わったとは言えません。むしろ格差は大きくなり厳しくなると言えます。しかしそれでもあきらめず、自分たちの力で貧困の固い鎖から自分を解き放つ子どもたちや女性たちが一人、二人と、

その努力を応援する人たちによって支えられ、生まれています。

たとえささやかな活動でも、ゼロではない。

今回の受賞を、今後もさらにこの活動を広げ進んでいけという応援の賞であると受けとめ、今後も一人、二人と、鎖から自らを解放する人たちを増やすべく、更に励んでまいりたいと思います。今回は、会場で普段はなかなかお目にかかることのない、全国の様々な活動をされておられる方と出会うことができたのも大変貴重な体験でした。ありがとうございました。 事務局長 小川 恵美子



▲ゴミ山で働く子ども



▲補習で学ぶ子ども



▲刺しゅうする女性



▲収入向上で製作している刺しゅう商品



▲現地の子どもと交流する日本の学生

特定非営利活動法人 グローカルギフトネット



東京都

欧米で行われていた、「一度もプレゼントを貰ったことのない貧しい地域の子どもたちにクリスマスプレゼントを贈る」という活動を、日本でも行いたいと平成15年頃から活動を始めたところ、活動が発展してゆき、プレゼントを贈る「ギフトプログラム」の他にスタディツアーを行う「国際教育・文化交流プログラム」、フィリピンでの幼稚園の運営や教育支援を行う「スポンサープログラム事業」、幼稚園児の母親が作るフェアトレード商品の販売などを行う「チャリティー事業」を主にフィリピンのマニラ、セブ島やカンボジアのプノンペンで行っている。平成21年にNPO法人に認可され、10年近くにわたり活動している。

(推薦者：NPO法人 希望の車いす)

代表理事
齋藤 望

この度は名誉ある賞をいただき心から感謝致します。長年取り組んでおられる団体や個人の方々が数多くおられる中で、まだ年数の短く経験の浅い私共の団体に目を留めて下さり、大変恐縮しております。本当にありがとうございます。

私たちNPO法人グローバルギフトネット（GGN）は、「生まれてから一度も誕生日、クリスマスにもプレゼントをもらったことがない子どもたちに、心をこめたギフトを届ける」という目的で活動しています。2005年に始まり、これまでに17000箱以上のギフトを東南アジア各国に配布してきました。

現在は、活動の中心であるギフトプログラムに加え、低所得家庭の子どもたちの生活・教育支援をする「スポンサープログラム」（フィリピンの幼稚園、カンボジアの孤児院の運営支援）、現地で生活している人たちに実際に会うことで、活動の意味・価値を理解する「国際教育・文化交流（スタディツアー）プログラム」、フェアトレード製品の企画販売を通して現地の就業を支援する「チャリティープログラム」の4つの事業を通して、アジアと日本の架け橋として活動しています。

毎年1～3月には、クリスマスに日本全国の学校や児童館・教育機関などから集められたギフトが東南アジア各国へと送られていきますが、ギフトを受け取る子どもたちは、貧しく困難な環境に置かれ、社会の中で片隅に追いやられている子どもたちです。全国の皆さんが作ってくださる心のもったギフトが、そのような環境の子どもたちに届けられ、作り手の「心からの気持ち」「愛」がメッセージとしてわかりやすく伝わります。またギフトを送る私たちも、いつももらうばかりではなく、自分が受けた愛を誰かに分かち合う（プレゼントする）心を学ぶことができます。この活動が、日本と世界の人々をつなぐ架け橋「グローバル（Global）」+「ローカル（Local）」＝「グローバル（Glocal）」となり、贈り物「ギフト（Gift）」を様々な形で届ける手助けをし、

この団体が主役ではなく、横のつながりを大切にするネットワーク「ネット（Net）」になっていくことを願っています。

厳しく困難な環境に置かれている子どもたちから将来、希望が生まれると信じて、これからも支援を続けていきます。

代表理事 斎藤 望



▲ギフト配布（フィリピン・バヤタス）



▲バヤタス幼稚園卒園式2014.3月



▲現地のお母さん達によるフェアトレード商品製作



▲フェアトレード商品製作



▲フィリピンへ衣類発送 GGN 事務所内にて



▲文花児童館ボランティア

宇佐川 照孝／宇佐川 秀子



熊本県

熊本県阿蘇警察署赤水駐在所に勤務する警察官の照孝さんとその妻、秀子さんは、交通事故防止のため、ランドセルの上から着用できる「蛍光ベスト」を発案し、反射板付の黄色い蛍光色ベストを日頃から率先して着用して見本となり普及に努めている。照孝さんが警察官になってすぐ、交通事故を起こした加害者の一家が心中を回った現場を見て以来、何とか交通事故を無くしたいとの一念から始めた活動。

(推薦者：西 勝代)

この度、瑤子女王殿下ご臨席の下、私達夫婦も社会貢献者として安倍昭恵会長様から直接表彰状を賜り大変有難く感じています。

私は、常に地域住民の皆さんの傍で安心安全を守る活動したいと自ら希望し、40年間の警察人生のうち、通算で16年間、駐在所に勤務しております。

1 交通事故の悲惨さと事故防止を伝える

警察学校を卒業して間もない頃、死亡事故を起こしてしまった加害者が賠償金を払えず、妻と小さな子供二人を道連れに4人でガス自殺された現場に臨場する事があり、それ以降、交通事故の悲惨さを皆さんに伝え、蛍光ベスト着用を推進すると共に、事故を起こさない、事故に遭わないため考え、行動して頂くよう導くことが使命だと考えて活動して参りました。

2 児童用蛍光ベストの考案

平成24年4月京都府で登校中の小学生の列に車が突っ込み3人死亡、7人が重軽傷を負った交通事故が発生したことを契機に夫婦で模索した結果、ランドセルの上から着用し、全方向から視認性が高い黄色蛍光ベストを考案、そのアイデアをサンエス技研様に無償提供したことで、安全性の高いベストが商品化されました。

3 交通事故防止以外の活動

- 市役所管理の防犯灯へ番号票貼付することにより不具合場所の早期明確化。
- 交通事故当事者に対し、事故後の示談手続き、交通事故証明書の発行などに関する説明書を交付し不安の解消。
- 道迷い箇所への手作り道標の設置。
- 登下校時、危険箇所に関心を持たせるためジュニアパトロール隊の結成。
など各種活動を発案、実践してきました。

4 地域振興へも関与

昭和57年春から26歳で黒川駐在所に勤務しましたが当時、黒川温泉は客足が途絶え閑散としていました。

私より8歳年上で、旅館の婿養子の方と知り合いになり、まずはこの人に「趣がある女性専用露天風呂」を造るように約2ヶ月間説得を続けた結果、昭和58年春、当時としては全国的にも珍しい女性専用露天風呂が完成し、女性客が大勢押し掛けたことが他の旅館に強い衝撃を与え、現在の黒川温泉の賑わいの原点となっています。

5 座右の銘

公私を問わず何かの縁でお逢いする人との一期一会を大切にしたいと思います。

座右の銘は、ラルフ・ワルド・エマーソン氏の「熱意無くして成し遂げられた偉業は未だかつて一つも無い」という格言です。

6 感謝と決意

微力ではありますが、今回の受賞に恥じないように今後も夫婦二人三脚で、一生懸命努力して参りたいと決意を新たにしました次第です。

式典開催のため御尽力頂きました安倍会長様、池田部長様はじめ財団の各スタッフの皆様本当に有難うございました。



▲宇佐川さん蛍光ベスト



児童の交通事故防げ

**お巡りさんが考案
反射ベストいいね**

阿蘇市・赤水

全方向から見やすい新型

お巡りさん

阿蘇市・赤水

児童の交通事故防げ

阿蘇市の児童が交通事故に巻き込まれる危険性が高い。お巡りさんが考案した、全方向から見やすい新型の反射ベストが、児童の交通事故を防ぐのに役立つと期待されている。

お巡りさんが考案した、全方向から見やすい新型の反射ベストが、児童の交通事故を防ぐのに役立つと期待されている。

掲載日2012-07-04 署名:黒川 ページ015

黒川毎日新聞・朝刊

▲宇佐川さん考案の反射材付黄色蛍光色ベスト

City Topics まちの話題

まちの話題の掲載は、紙面確保方針前版(巻2311)まで取捨してください

地域の安全は私たちに任せて！
阿蘇西小ジュニアパトロール隊発足



阿蘇西小6年生の皆さん

阿蘇西小では地域の安全を守るため、ジュニアパトロール隊を発足し、6月25日、阿蘇西小で阿蘇警察署から受けた。交付を受けた児童は、6年生14人のパトロール隊は、下校時に危険箇所などについて、安全に暮らせるように「安全に暮らせるように」という思いを込めて、地域を歩きまわるとして、大人では気づか

▲阿蘇西小6年生・ジュニアパトロール隊結成の記事

医療法人 聖粒会 慈恵病院



熊本県

熊本県で、平成19年に日本で初めて様々な事情で親が養育できない新生児を匿名で受け入れる「こうのとりのゆりかご」を設置した。県内で乳幼児の置き去りが相次いだことから、同病院の院長や看護師らがドイツで、70か所に展開するベビークラブ（赤ちゃんポスト）を視察し、そこで見たシステムを参考にした。こうのとりのゆりかごの運営より以前から様々な事情で育てられない女性を出産前からサポートし、生まれた赤ちゃんが家庭で育てられる様、特別養子縁組を行うボランティア活動に主に力を注いでいる。

(推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団)

理事長兼院長
蓮田 太二

この度は社会貢献支援財団様より表彰して頂き、誠に有難うございました。

帝国ホテルという日本で一番の格式あるところで、これ程温かい中に盛大で厳粛な式典に感動致しました。表彰を受ける方々の業績の紹介には、一つ一つが素晴らしく、強く心うつものがあり、世の中にこんなに素晴らしい社会貢献をしておられる方がおられることを知り、何と素晴らしい式典に参加させて頂いたかと心より有難く思いました。

私共は育てられない赤ちゃんを匿名で預かる「こうのとりのゆりかご」を設置し、それに伴う相談業務を始めまして丸7年を経過したに過ぎませんが、命の電話を27年も続けておられる方、そしてその相談件数の多さにはただただ驚きと畏敬の念を禁じえませんでした。人命救助、汚濁した海水の再生など沢山のご発表を見聞きし、何と素晴らしいことかと新たに感動を深くしました。

私共のやっておりますことには、行政並びに一般社会からも厳しい批判を浴びることが多々ありますが、一人一人のケースが他人には伺い知れない悩み、苦しみがあり、そのような女性に寄り添って赤ちゃんの命を救うことは、カトリックの修道院が創設した病院の一員としては当然のことであり、そのような社会的に小さい人達に尽くすことが出来るのは私達にとっては、幸せなことであります。親が育てられず特別養子縁組として家庭に入ってしまった子ども達が幸せに元気に育っている姿を見るにつけ、その家庭と周囲の方々の幸せな姿に私達は大きな喜び、力を頂きます。

この度の表彰式では沢山の方にお会いし、お話し、励ましの言葉を頂き、どんなにか嬉しかったことでしょう。会長の安倍昭恵様、選考委員の内館先生のお話も素晴らしく、何より日本財団の笹川会長様のお言葉には感動し、今から更に頑張っていこうという気持ちになりました。こちらに帰りましたから沢山の方々からお祝いの言葉を

頂きました。

今行っている悩み苦しむ女性を助け、赤ちゃんの命を守るということだけでなく、幸せになってもらうために色々な壁があっても努力していこうと考えます。

この度の受賞で職員みんなが大きな力を頂きました。本当に有難うございました。

式典の準備のために私共のところに度々お出で下さいました池田様をはじめ、深いお心遣い、ご準備をして下さいました関係の皆様
に心より感謝申し上げます。

理事長兼院長 蓮田 太二



▲外観



▲ワールドキャンパス（世界各国の青年が日本を周る）研修会でディスカッション中



▲外来診察



▲ワールドキャンパス研修会集合写真



▲腹腔鏡手術



▲中学校にて性教育講演